

左、玄関前の土間のリビングとつながるキッチン。家族やゲストとの会話が弾むよう、オープンでゆとりを持って廻れる設計に。右、リビング土間の一角にはアンティーク煉瓦を積んで薪ストーブを設置。マンションのリノベーションでも、このような本物の素材をアクセントに使うと、重厚感が出る

右、左上、玄関を入るとタイルを敷いた土間のリビングが広がる。高い天井に渡る立派な古い梁は、構造そのものがアートのような。この構造が見たかったというファンも多いほど。自然の経年美を楽しみたい。左下、キッチンとの間の壁にはアールの窓を設置。アイアンの装飾がスペイン漆喰の塗り壁に似合う



BEFORE



土間と畳の間の紙を紙で仕切っていた日本の昔ながらの家。土間からの湿気や冷気が溜まっていた

AFTER



左、建物の基礎にコンクリートを打ち、湿気や冷気を和らげることに成功。右、土間と室内を仕切る引き戸は、海外のガラスを用いた【ハウスランド社】の造作

和と洋のデザインが調和する、新時代の古民家リノベ

れ難くなるそう。

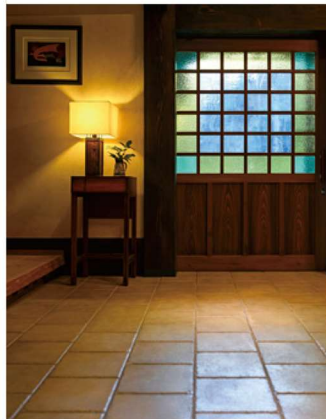
実際に「風のくら」を見学した人の多くがこの土間に心を奪われ、離れ難くなるそう。

「もともとここにはおおくどさんがあり、足元は寒くてジメジメとした土間でした。同じ土間でも、現代の建築技術と素材、アイデアを組み合わせて、これだけ洒落た空間になりました。そもそも日本の古民家は懐の深い建物。紙や木という日本建築に見られる要素は、西洋建築で多用される煉瓦や鉄、海外のアンティーク家具などとの相性がとてもいい。だからリノベーションの面白さ、可能性の大きさを体感していただけるはずですよ。」【ハウスランド社】のスタッフは話す。

「外から見たイメージは堂々たる純和風建築だが、玄関の引き戸を開けると、渡る天然木の太い梁は、新築の家ではまずお目にかかれぬ存在感を放ち、スペイン漆喰の壁とイタリア製のタイルを床に敷き詰めた広い土間は、まるでカフェのようなアンティーク煉瓦を積み重ねたコーナーには、薪ストーブが燃えている。

「外から見たイメージは堂々たる純和風建築だが、玄関の引き戸を開けると、渡る天然木の太い梁は、新築の家ではまずお目にかかれぬ存在感を放ち、スペイン漆喰の壁とイタリア製のタイルを床に敷き詰めた広い土間は、まるでカフェのようなアンティーク煉瓦を積み重ねたコーナーには、薪ストーブが燃えている。

筑紫野市の総合公園から車で山手ダム方面へ進む。ホテルも飛ぶという清らかな川が間を流れる小さな集落、その一角に「ハウスランド社」のモデル住宅「風のくら」はある。元の家が建てられたのは明治5年のこと。「ハウスランド社」は築約150年の古い民家を買い取り、基礎を打ち直し、断熱材や屋根を変えて、室内も全面的にリノベーションを施した。



古民家再生 住宅展示場 kaze no KURA

風のくら

美しく、新しい。 リノベの可能性を体感。

緑豊かな山里に佇む「風のくら」は、【ハウスランド社】のモデル住宅。明治初期の古民家に“洋”のデザインを取り入れながら、現代の暮らしに合う住まいへとリノベーションされています。ここは、古い家の良さを巧みに活かすアイデアと技術の集大成。空間のいたるところに、家づくりのヒントが息づいています。